

## 第X部

### 否定(3) 否定構造

ここでは、第IX部に続いて、否定の基本的な諸構造を扱う。

第30章では、「ある」の否定はなぜ「ない」か、これについて考える。

「ある」の否定形式と反対語との関係を探り、また歴史的な変化の過程をたどってこの問い合わせる。

第31章では、断定基「だ・である・です・であります・でございます」の否定の構造を考える。

第32章では、形容詞の否定構造を考える。

二重否定の構造についても考える。

## 第30章

# 「ある」の否定はなぜ「ない」か

### 30.1 「ある」の否定は「あらない」？

「本がある」の構造は図30-1のように示すことができる。

日本語の動属性の否定構造は否定属性 -(a) na. k- (26. 3) を付加することによって得られるのであるから、「ある」の否定構造も -(a) na. k- を付加して得られ、図30-2, -3のようになるはずである。

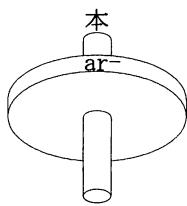


図30-1 本がある

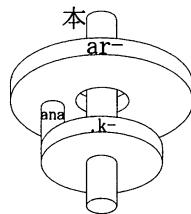


図30-2 「本がある」の否定構造

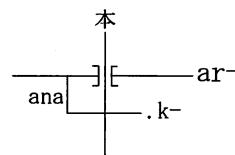
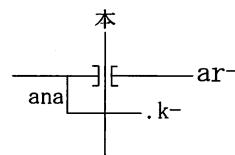


図30-3

この図30-2, -3の否定構造を描写すれば、

本が ar-ana. k-i (本があらない < k はゼロ化する 8.3参照>) となる。しかし、「あらない」という表層言語形式ではなく、実際には「本がない」と言う。これはどう考えればよいのだろうか。

### 30.2 「ない」とは何か

「ない」というのは、古くは「なし」であった。『岩波古語辞典』の形容詞「な・し」の項には次のような例が挙げられている。

「汝(な)を置(き)て夫(つま)はな・し」<記歌謡五>

「つらき心の有りな・しを見む」<和泉式部日記>

この「なし」は古典文法では、連用形が na.k-u、終止形が na.s-i、連体形が na.k-i、已然形が na.k-ere となっている。形容辞 .s- は終止形のみに現れ、他はそれに代わってすべて .k- で現れている。

そこで、現代語との連續性を考慮して、形容辞を .k- に代表させれば、その構造は図30-4のように図示できる。この構造は基本的に現代語の形容属性「ない」の構造でもある。たとえば「本がない」は、図30-5のように構造表示できる(第8章参照)。

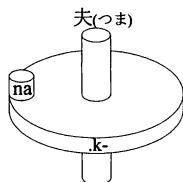


図30-4 夫(つま)がない

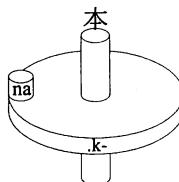


図30-5 本がない

では、これと「本があらない」(図30-2, -3)の関係はどうなっているのだろうか。

### 30.3 反対語「ない」を、否定形式「あらない」に代用

「ある」の否定は一般に「ない」であると考えられている。だから、  
本がある。

という文を否定文にせよ、という国語の問題があれば、だれでも  
本がない。

と答えるであろう。まちがっても  
本があらない。

とはしないであろう。

現に、国語辞書(『岩波国語辞典』)の「ない [助動詞]」の項にも  
「ある」を否定する場合は全体が形容詞「ない」になる  
とある。

しかし、果たしてこの「ない」は本当に「ある」の「否定」なのだろうか。  
「ない」は「ある」の「反対語」ではないのだろうか。「ある」の否定はあ

くまでも「あらない」なのではないだろうか。これは実は大きな問題である。

「反対」と「否定」とは異なるものだからである。

形容詞「良い」で考えれば、反対語は「悪い」である。否定は「良くない」である。「良くない」の中には「悪くない」のものも入るから、否定「良くない」と反対語「悪い」は同じではない(図30-6)。

同様に、形容詞「大きい」の反対語は「小さい」であって、これは否定の「大きくない」と同じではない。「大きくない」の中には、普通サイズのもの(小さくないもの)も入るからである(図30-7)。

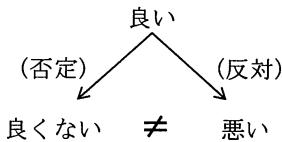


図30-6

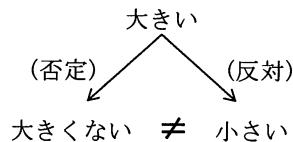


図30-7

動詞で考えても、「作る」の反対は「こわす」であって、これは否定の「作らない」とはまったく異なっている(図30-8)。

反対と否定とは異なる概念である。

ところが、存在表現に関しては事情が異なっている。「ある」の反対語である「ない」は非存在を意味し、また、否定である「あらない」も非存在を意味する。

他の語の関係では、(大きくもなく小さくもないという)いわば中間項が両形式間に存在するのに、「あらない」と「ない」の場合は、(非存在の程度の)中間項がないから、反対語「ない」は否定形式「あらない」と意味の上ではまったく同じもの(「非存在」)になる(図30-9)。

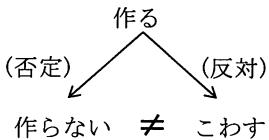


図30-8

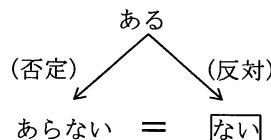
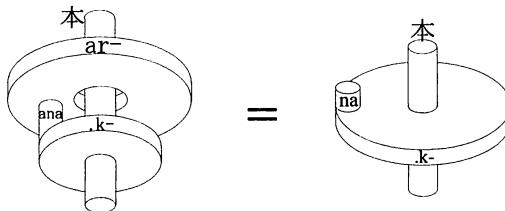


図30-9

このような事情から、図30-2と図30-5とは、意味的に等価なのである。



(図30-2再掲 本があらない) (図30-5再掲 本がない)

意味的に同一であれば、どちらを使ってもよいわけで、ならば短い方を使うというものが言語の一般的傾向である。(また、「ない」で済むところを「あらない」としては、精神の弛緩を感じさせてしまう。) つまり、現代日本語では、動詞「ある」の否定形は「あらない」であるべきところを、意味的に同一の反対語「ない」で代用するようになっていて、「ある」の否定形は「ない」のである。

#### 30.4 丁寧形では、いわば逆

もっとも、丁寧形「あります」になると事情は異なっている。

本がありません。

のように、「いません」という否定の形がきちんと存在するうえ、反対表現「ないです」が存在する。そして、「本がないです」のように反対表現を使用してもよさそうな場合にも否定表現「いません」の方が好まれている(これは、かつて形容詞に「です」を続けることに抵抗があったためであろう)。

つまり、丁寧形「あります」では、反対表現の代用として否定表現が使用される場合もある(図30-10)のであり、普通形「ある」の場合とは、いわば逆なのである。

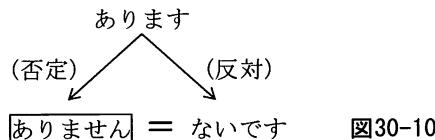


図30-10

では次に、反対語の「ない」がどういう経緯で否定形式にとって代わったのか、歴史的変化のあとをたどってみたい。

### 30.5 関西の否定「ぬ・ず」……「あらず」

奈良・京都を中心とする古典語には「ある」の否定と考えられる「あらず」という表現がある。古典語では否定と反対が別々に存在していた。

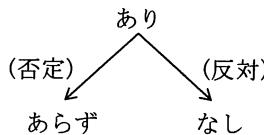


図30-11

この「あらず」に現れる助動詞「ず」については『岩波古語辞典』にこうある(p. 1478)。

「ず」には古い連用形と思われる形の「に」がある。従って、打消の助動詞には「に・ぬ・ね」という系列があって、その方が古く、後に「ず」が発達したものと思われる。……(中略)……古い打消の「に」に「す」が結合して nisu → nzu → zu という変化によって「ず」という形が成立したらしい。

そこで、これをもとにして「あらず」の構造を考えてみる。

動属性 ar- (図30-12, -13) の構造があって、まずこれに -an- という否定属性が結合して ar-an- という構造ができる (図30-14, -15)。否定属性が結合したので、主体(雲)と属性(ar-)の結び付きが解除されている (26. 1, 3)。

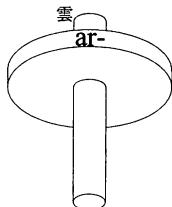


図30-12

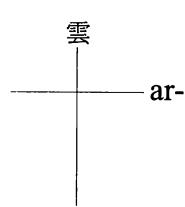


図30-13

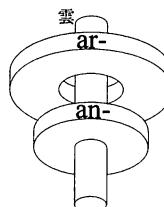


図30-14

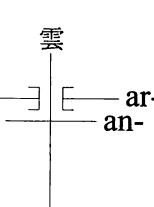
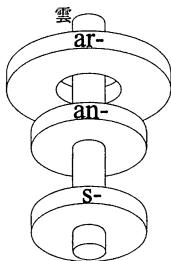


図30-15

次に、これにおそらく動属性であろう「す」が加わって、ar-an-i=s- という構造ができる(図30-16, -17)。(ここに出現する -i= は連続描写詞(9.1)であり、直接の構造構成要素ではない。)

そして、ar-an-i=s- の下線部が一音化して ar-az- となる(図30-18, -19)。



雲∅,ar-an-i=s-u  
図30-16

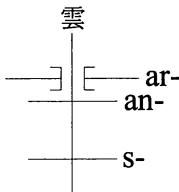
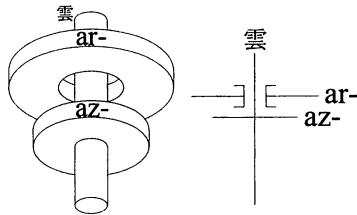


図30-17



雲∅,ar-az-u  
図30-18

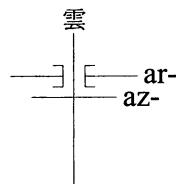


図30-19

この「ず」は未然形・連用形・終止形で用いられることになったが、連体形「ぬ」・已然形「ね」では図30-14, -15の構造のままであった。

また、この事実に重ねて、室町時代には終止形(「ず」)が連体形「ぬ」と同じになった。その結果、この否定の基本形が「ぬ」となり、基本的な構造は図30-14, -15の構造に戻ることになった。

この「ぬ(ず)」が、いわば関西の否定助動詞であった。

### 30.6 関東の否定「なふ」……「あらなふ」→「あらない」

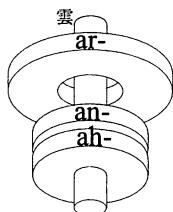
一方、関東方言には古くから「なふ」という否定助動詞があった。『助詞助動詞詳説』にはこうある(p. 252)。

上代東国方言に打消の助動詞「なふ」があった。ナ行系の未然形「な」に上代に多く用いられた助動詞「ふ」の添うたものと考えられている……(後略)……。

そこで、これをもとにして構造を考えると、こういうことになる。

図30-14, -15 の構造に、関西では s- が加わったのであるが、関東では -ah- が結合し、ar-an-ah- という構造形式ができた(図30-20, -21)。そして、

これがさらに ar-anah- という形になった(図30-22, -23)のである。



雲∅, ar-an-ah-u  
図30-20

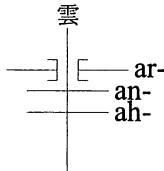
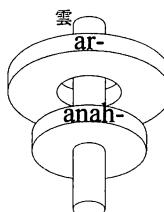


図30-21



雲∅, ar-anah-u  
図30-22

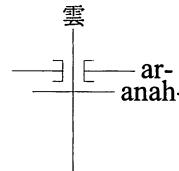


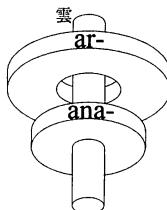
図30-23

この東国方言の否定形式が今日の否定の「ない」のもとになっている。

『岩波古語辞典』「な・ふ」の項にこうある。

連体形ナヘが、後世ナエと発音され、今日の関東・東北方言の打消のナイの源となった。

つまり、図30-22, -23 のあとに図30-24, -25 の構造となったわけである。



雲∅, ar-ana-i  
図30-24

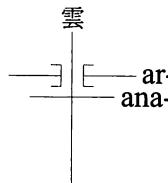


図30-25

当初はこの「ない」には活用形がなく、この形で終止・連体のみで使用されていた。

### 30.7 江戸時代になって関東の「ない」が関西の「ぬ」より優勢に

万葉時代の大和地方の「ず(ぬ)」と、東国の「なふ」の対立に始まる東西の否定形式のせめぎ合いは、江戸時代になってその勝敗が見えてきた。『助詞助動詞詳説』の p. 256 にこうある。

東国語から脱皮して、江戸に新しく誕生した「ない」は徐々に生長して、明治期にはいって今日に至るまでによくやく旧来の関西系の「ぬ」を片隅に追いやっていっそう発達してきているといえるのである。

なお、『言語学大辞典(下)』の「琉球列島の言語」によれば(p. 841)，

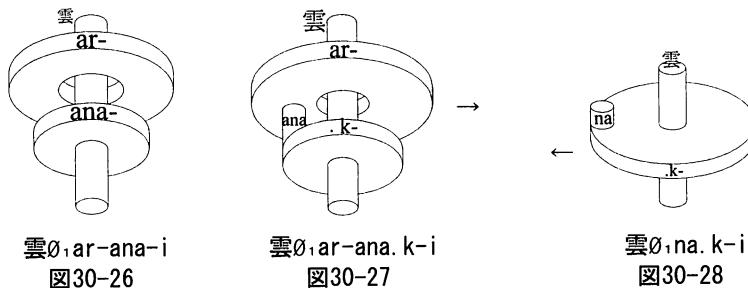
沖縄諸方言においては、「ぬ」系と「なふ」系との2つが、うちけしの形として広く使用されている。

という。

江戸時代になって、「ない」が「ぬ」に取って代わったわけである。しかし、今も述べたように、当初は「ない」はこの形のままで使用されていた。

『助詞助動詞詳説』(p. 256)によれば、これが形容詞の「ない」との類推で今日のような活用をとるようになったのは江戸も後期になってからであった。

形容詞型の活用をとるようになった変化は、構造形式の上では、図30-26から図30-27への変化として表現することができる。否定属性の部分が形容属性「ない」の構造(図30-28)と同型になったのである。



こうして歴史的にもたらされた活用・音の類似と「意味の共通(30.3)」によって、語形の長い否定形式「あらない」よりは、語形の短い反対語「ない」が好んで使用されることになり、否定形式が反対語形式へと置き換えられ、「ない」に統一されるようになった(図30-29)。

ただ、「あらない」の使用例がごく限られたものしか残っていないことから、この統一にはほとんど時間がかからなかつたことが推測される。

なお、参考までに、一般の動詞の場合の例として「ひらく」を図示してお

く(図30-30)。一般的の動詞では、否定形式と反対語は別々に存在している。

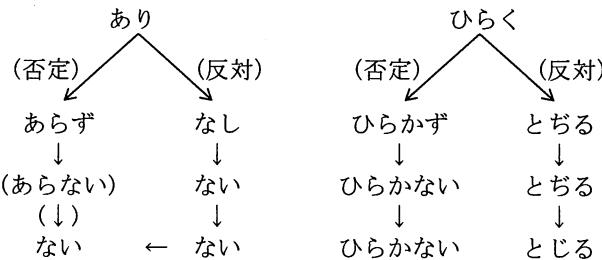


図30-29

図30-30

さて、上に見たように、「あらなふ」が「あらない」となって、語形の中に「ない」という部分が生じたのであるが、果たしてこれは偶然だったのであろうか。それとも形容詞「ない」に引かれて必然的にそうなったのであろうか。たぶん後者であるのだろうが、いまのところ断言することはできない。

また、もし仮に、今日でも否定形式が「あらなふ」の形を保っていたとすれば、今なお「ある」の「否定」(あらなふ)と「反対」(ない)の語形式は別のものとして区別され続けていたはずである。

### 30.8 同じ「ない」でも、否定なら構造は「あらない」

以上の考察から、「ある」の否定「ない」の構造を扱うときは、こういうふうに対処するのが妥当だということになるだろう。

同じ「ない」でも理論的には「ある」の反対の「ない」と否定の「ない」があるはずであるが、その両者は区別がつかない。そこで、反対の「ない」として扱う必要がある場合には形容属性「ない」の構造(図30-5)で扱うことにして、否定の「ない」として扱う必要がある場合には「あらない」の構造(図30-2)で扱うこととする(31.1, 32.6)。つまり、その構造を扱うつど、目的に合う構造を選んで使用することにするのである。

(なお、「あらない」として扱う際の「ない」は、便宜的に「あらない」の「あら」が描写されないものと考えると扱いやすくなる(32.6)。)

「ある」の否定「ない」は、構造上ではこのように扱うことに決めたい。

## 第31章

## 「だ・ある・です」の否定構造

## 31.1 「だ・ある」の否定構造……「(は)ない」

彼女は医者ある。

という文の構造は図31-1のようになっている(11.1①)。そして、この構造は  
彼女は医者だ。

の構造でもあるわけである(11.1②)。

この構造に否定属性 -(a)na.k- を付加することによって、図31-2のよう  
な否定構造を作ることができる。

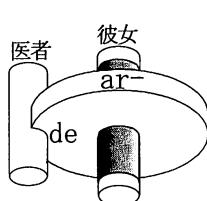
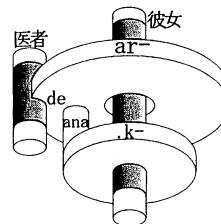
図31-1 彼女は医者ある/だ

図31-2 否定構造

この否定構造をこのまま描写すれば、

彼女は医者では ar-ana. k- (あらない)

となる。しかし、実際にはこのような表現はなく、

彼女は医者で(は)ない。

となるわけで、ここには前章で扱った「ある」の否定の問題がそのまま現れ  
ている(30.1)。

前章で明らかになったことは、本来別のものであるべき「ある」の否定形  
式と反対語が、現在では反対語の「ない」という形式に統一されてしまって

いることであった。統一されているからには、理論的には、「ない」には否定の「ない」と反対の「ない」があるはずであるが、意味上その両者は区別がつかない(30.3)。それで、同じ「ない」でも、反対の「ない」として扱う必要がある場合には形容属性として扱い、否定の「ない」として扱う必要がある場合には「あらない」の構造で扱うのがよいということになった(30.8)。

したがって、「ではない」を「だ・である」の反対として扱うときには図31-3の構造で考え、否定として扱うときには図31-2の構造で考えることになる。特に二重否定の扱いでは後者の構造で考えることが必須となる(32.6)。

(図31-3の反対の構造は、図31-2の否定の構造と意味的に等価であり、しかもより単純するために、否定の場合でもこれが代用される。否定を正面から扱う際にはこの代用の関係を解除し、本来の形式に戻す必要がある。)

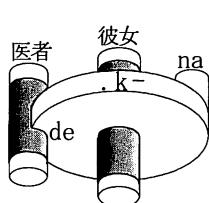
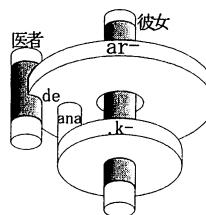
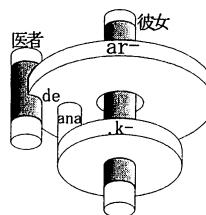


図31-3 彼女の医者ではない na.k-

=



=

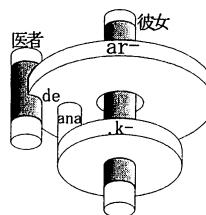


図31-2再掲 彼女の医者ではない ar-ana.k-

### 31.2 「です・あります」の否定構造……「ではありますん」

彼女の医者です。

彼女の医者あります。

の2構造は同一のもの(11.1③④参照)で、図31-4,-5のように図示できる。

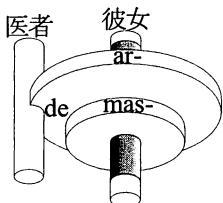
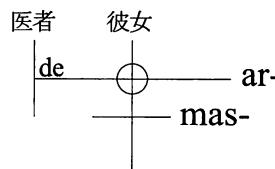


図31-4 彼女の医者です ar-mas-de



「です・あります」両者の否定はともに

彼女のは医者ではありません。

のように「ではあります」となる。この構造は図31-4の構造に否定属性の-en-が付加されて、図31-6, -7 のようになつたものである。

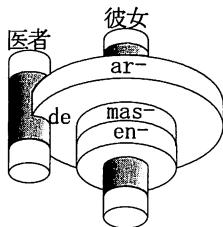


図31-6 医者ではありません

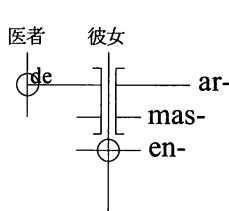


図31-7

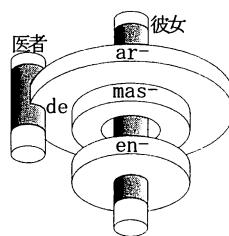


図31-8

図31-6 では、-en- が付加されたことによって「彼女」という主体が ar-, mas- という 2 つの属性との結び付きを解除されている。このことを構造図でもう少しありやすく表示したものが図31-8である。

### 31.3 「です・あります」の反対構造……「ではないです」

「だ・である」の場合は「否定」が「反対」の「ない」と同一のものになった(31.1)。しかし、丁寧の「です・あります」の場合はそうではなく、「否定」と「反対」は別形式のまま別々に存在している(30.4参照)。

「否定」は「ではあります」であり、これについては 31.2 で述べた。  
「反対」は「ではないです」である。ここで、この「反対」の「では」  
ないです」の構造に触れておく。

もし仮に、

彼女のは医者であります。

の「反対」の文が

\*彼女のは医者ではないます。

という形式をしているのであれば、構造の観点からは美しいものになる。しかし、「ます」が形容属性と結びつくような関係は歴史的に形成されなかつたので、実際には

彼女の<sub>0</sub>は医者ではないです。

という形式になっている。

ここで使用されている「です」は「形容属性丁寧化基」，別名「いです基」であり，8.6で述べたところのものである。次の①②の形式をしている。

① -i=θ-de=ar-i=mas-u      (例：oishi. k-i=θ-de=ar-i=mas-u)

② -i=θ-de=θ -θ=s-u      (例：oishi. k-i=θ-de=θ -θ=s-u)

. k- はゼロ化する(8.3参照)。

「彼女の<sub>0</sub>は医者ではない」の構造を組み込んだ「いです基」の構造は図31-9,-10のようなものである。

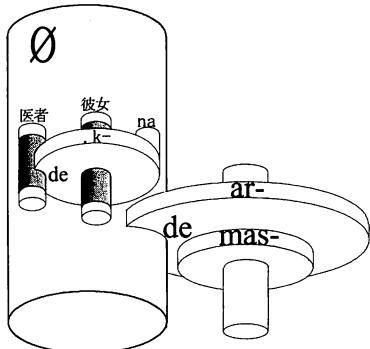


図31-9 彼女の<sub>0</sub>は医者ではないで(あります)す

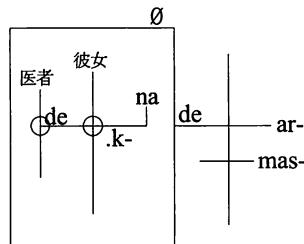


図31-10

このように「～で(は)ない」が「いです基」に組み込まれた場合は、次のように「いです基」の①の使用は限られるようである。

①' 彼女の<sub>0</sub>は医者ではないであります。

②' 彼女の<sub>0</sub>は医者ではないです。

また、この「いです基」は、断定基の「です」と異なり、「だ」での描写ができない。否定「ではありません」にすること等もできない(8.6)。

\*彼女の<sub>0</sub>は医者ではないだ。

\*彼女の<sub>0</sub>は医者ではないではありません。

「です・であります」の反対構造「で(は)ないです」には、以上のような形で「いです基」が関わっている。

## 31.4 「でございます」の否定構造……「ではございません」

私は医者でございます。

の構造は図31-11,-12のとおりである。「であります」の構造(図31-4)の動属性 ar- の ni格に実体「御座」が立った形のものである(11.1⑤)。

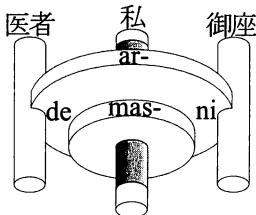


図31-11 私は医者でございます

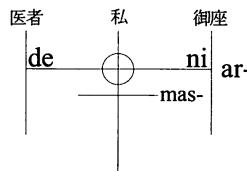


図31-12

これの否定である

私は医者ではございません。

の構造は否定属性-en-が付加されて(31.2参照), 図31-13,-14のようになる。

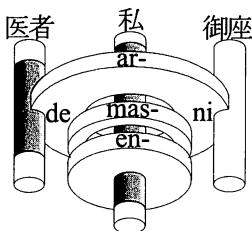


図31-13 私は医者ではございません

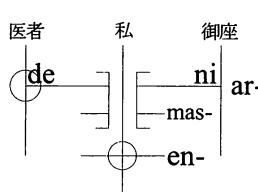


図31-14

「でございます」の否定形式は、このような形をしている。

では、反対形式はどうなのだろうか。本来なら反対形式は構造中の ar-をna. k- に換えれば得られ、「ではござないです」となるはずである。しかし、「ござない」は室町時代に用いられたこともあった(『日本文法大辞典』p. 231)が、現代日本語にはこのような表層形式は存在していない。丁寧さの度合いをそんなに細分化して序列化しても実際の使用には不便であるからであろう。……ということはつまり、「でございます」の場合は、反対形式の代わりに否定形式を用いているのである(表31-1)。

### 31.5 否定形式と反対形式の関係

以上で得られたそれぞれの否定形式と反対形式の関係を一覧表にしてみれば、表31-1のようになる。

否定形式と反対形式の関係

表31-1

基本形式	否定形式	反対形式
だ・である	反対形式を代用 <del>で(は)あらま</del>	で(は)ない
です・あります	で(は)ありません	で(は)ないです
でございます	で(は)ございません	否定形式を代用 <del>で(は)ござないで</del>

基本形式に mas- を含まない「だ・である」では反対形式のみが存在する。基本形式に mas- を含む「です・あります・でございます」では否定形式が優勢である。前者では簡潔性が、後者では丁寧性が尊重されるためだろうと考えられる。(簡潔性と丁寧性の妥協点にあるのが「で(は)ないです」であると言えよう。)

また、丁寧の段階は4段階考えられるが、4段階もあっては使い分けに困るということもあって3段階になったということが推測できる。

表から、肯定には3段階あり（だ、です、でございます），否定（・反対）には4段階あると読み取ることができる。否定（・反対）が1段階多いのは、肯定より否定の方が気遣いが必要であるからであろうとも考えられる。

「5枚に書類サインした」と言えないのはなぜ？ → p. 332

「くださる」「いただく」の違いは何？ → p. 338

「～させてください」はどんな構造？ → p. 342

「日本語構造伝達文法」って、何？ → p. 343

「日本語構造伝達文法」はどのようにして生まれた？ → p. 350

## 第32章

## 形容詞の否定構造

## 32.1 「高い」の否定……「高くない」

高尾山 $\emptyset$ は taka. k-i (高い)。

という文の構造は図32-1, -2のとおりである(8. 1~3)。

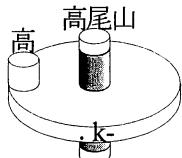


図32-1 高尾山 $\emptyset$ は高い



図32-2

動属性であれば否定属性 -(a) na. k- を用いて否定構造を作るところであるが、形容属性の場合は否定属性 =na. k- を用いて否定構造にする。

高尾山 $\emptyset$ は taka. k-u=na. k- (高くない)

taka. k-u の -u は「連続描写詞」(9. 1)である。

この na. k- が付加されることにより、主体(高尾山)と属性(taka. k-)の結びつきが解除される。構造を示せば図32-3, -4のようになる。

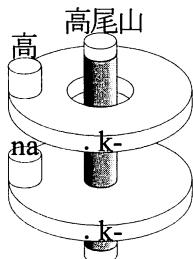


図32-3 高尾山 $\emptyset$ は高くない

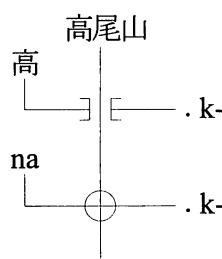


図32-4

そこで、形容属性の否定の形式は

(形容実詞). k-u=na. k-

という基の形で表現することができる。この基の構造図は図32-5,-6のようになる。

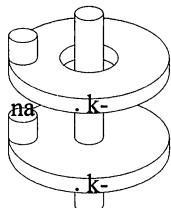


図32-5 形容属性否定基

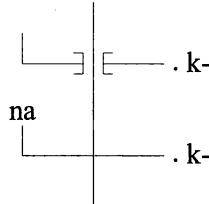


図32-6

## 32.2 高くはない

否定表現には

高尾山01は taka. k-u=wa=na. k- (高くはない)

のように「は」が入ることも多い。この場合は、形容実体「高(taka)」が「は」による相対化描写を受けるので、図32-7,-8のような構造となる。

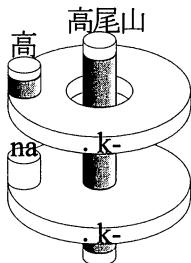
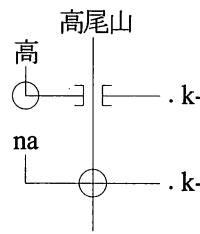
図32-7 高尾山01は高くはない

図32-8

形容実体「高」が相対化描写を受けるので、

高尾山は高いの？ —— いや、高くはない。

のように、「高」が特に話題の中心とされた上で否定されたり、

高尾山は高くはないけど、信仰の対象だ。

のように、(信仰の対象であることのような)何らかの事実と対比された上で

否定されたりするようなニュアンスになる。

### 32.3 形容属性否定の「ない」と、形容属性の「ない」

ところで、「高くない」の「ない」は「テレビがない」の「ない」と酷似している。しかし、この両者は同じものではない。一方は形容属性を否定する「ない」であり、一方は非存在を表す形容属性の「ない」であって、構造形式によって明瞭に区別できる。

「高くない」の「ない」は図32-5のように、.k-u=na.k- という基の一部として機能し、「ない」の上の形容属性と主体との結びつきを解除する。一方、「テレビがない」の「ない」は図32-1の「高い」のように単独で主体と結びついて、非存在を表す。

それで、次の2文は異なる構造となる。

a) それはもろくない。 図32-9

b) それはもろく、ない。図32-10（「今はもうない」の意）

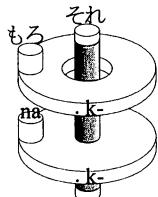


図32-9 それはもろくない

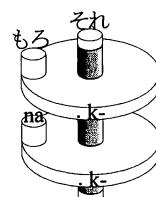


図32-10 それはもろく、ない

同じように見える「ない」ではあっても、このような区別がある。

### 32.4 3種類の「ない」

非存在の「ない」については第30章で言及したのであるが、その結果、「ある」の否定の「ない」と、「ある」の反対の「ない」が存在することが分かった。それに加えて、ここで新たに形容属性否定の「ない」が登場した。そこで、この3者を表にして整理してみる(表32-1)。

## 3種類の「ない」

表32-1

①	動属性「ある」の反対の「ない」	非存在の「ない」	形容属性	<u>na. k-</u>
②	動属性「ある」を否定する「ない」 (=あらない)		否定属性	(ar-a) <u>na. k-</u>
③	形容属性を否定する「ない」			( ) . k-u= <u>na. k-</u>

①②の非存在の「ない」は意味・形態の上では区別がつかない。区別がつくのは、②を「あらない」として扱う場合での構造形式の上でだけである。

しかし、この両者と③は意味・接続関係・構造の上で明確に区別できる。

ところで、③の形容属性否定の「ない」は、なぜこのような形をしているのであろうか。次にこの理由について考えてみたい。

## 32.5 「高くあらず／高からず」から「高くない」へ

形容詞にはもともと否定形というものはなかった。

形容詞は最も古くは「連用形(高く)・終止形(高し)・連体形(高き)」の3形のみが存在していた(遅れて「已然形(高けれ)」が「連体形(高き)+あれ」の形から生じた)。

しかし、これでは否定を始め、過去や推量等の表現ができないので、連用形(高く)に動詞「あり」をつけて(高かり)、形容詞を擬似動詞にすることによって下に助動詞を置くことができるようとした。その結果、否定の助動詞「ず」が使えるようになり、否定形(高くあらず、高からず)が生まれた。奈良・平安時代のことである。(以上『日本語の文法〔古典編〕』p. 160)

つまり、形容詞否定形は、古典語では

taka. k-(u)=ar-az-u (高からず)

taka. k-(u)=ar-an-u (高からぬ)

という形をしていたわけである。この構造は図32-11～-14のように示すこと

ができる(30.5参照)。

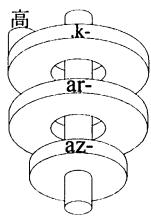


図32-11 高からず

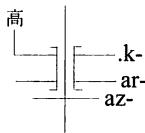


図32-12

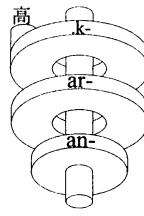


図32-13 高からぬ

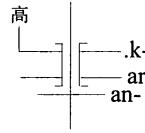


図32-14

taka. k-(u)=ar- という動詞的な形容基が作られ、これが -az-u/-an-u の古典的な否定属性により否定された。

この形容基が作られたのは、形容属性を否定するためであったので、 -az-u/-an-u の直接の否定対象が =ar- であったにもかかわらず、基の中のもう一つの属性 taka. k- も同時に否定されることになった。

動属性の否定属性としての -az-u/-an-u そのものは、以後変化し、  
-(a)na. k- となって今日に至っている(30.5~7)。

しかし、動詞が ar- である場合には、否定形はこの  
ar-ana. k- (あらない)  
という形ではなく、(ar-の反対の)

na. k- (ない)

という形になったことが第30章で明らかになった。

形容属性の否定の場合にもこれと同じ変化が生じた。形容基が ar- をもち、擬似動詞であるためである。

taka. k-(u)=ar-az-u

taka. k-(u)=ar-an-u

↓

taka. k- u =na. k-

「高からず／ぬ」が「高くない」となった。

このようなわけで、形容属性の否定形も「～ない」という形になったのである。

## 32.6 二重否定「～なくはない」……不完全な肯定

高尾山の1は高くない

をさらに否定して

高尾山の1は高くなくはない

という形式を作ることができる。その構造は「高くない」の下にさらに「ない」を付け加えたもので、図32-15, -16のようになる。

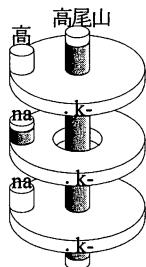


図32-15 高尾山の1は高くなくはない

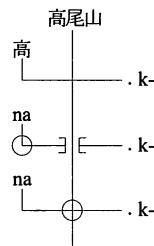


図32-16

下段の「ない」が中段の「ない」を否定するので、中段の「ない」が主体(高尾山)の属性であることをやめ、否定の効力を失い、その結果、主体(高尾山)と形容属性(高い)とが再び結びつく。

上段に肯定、下段に否定が現れ、肯定の部分と否定の部分が共存する構造になる。このようなことが可能になったのは中段が存在することになったためで、この中段がなければ、図32-5のように本来の否定構造にならなければならぬところである。

ここに出現した肯定と否定の共存という構造で、「不完全な肯定」が表現できることになる。二重否定は肯定に戻ると言われるが、否定前の本来の肯定に戻るわけではなく、なにがしか条件のついた不完全な肯定に戻るのである。

高尾山の1は高くなくはない。

というのは(もっと高い山を意識しているなど)何らかの理由のために無条件に肯定する(「高い」と言う)ことのできない状況を表現するものである。完

全には肯定することができない状況にあることの表明である。

このようにして考えると、二重否定「～なくはない」の構造は、肯定と否定とを共存させる構造で、それにより不完全な肯定を表現することのできる構造である、と言えよう。

なお、「～がなくはない」というときの構造は「～が(あら)なくはない」として扱った方がよい。肯定に戻ったときに「ある」が現れるからである(30.8参照)。図示すれば図32-17, -18のようになる。

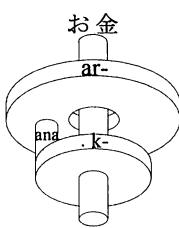


図32-17 お金がない

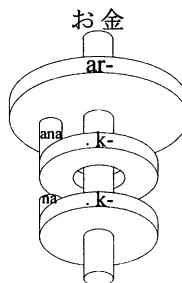


図32-18 お金がなくはない

### 32.7 丁寧な否定……「高く(は)ないです・高く(は)ありません」

形容属性の丁寧な否定形には2種類ある。

- a) 高く(は)ないです。
- b) 高く(は)ありません。(高く(は)ございません。)

この両者の構造は次のようにになっている。

a)の場合、形容属性丁寧化基「いです基」(8.6 及び 31.3)を使用している。構造図は図8-10 及び 図31-9と似たものになり、包含実体  $\emptyset$  の中に「高く(は)ない」の構造が入る。

b)の場合、図32-19, -20, -21のようになる。

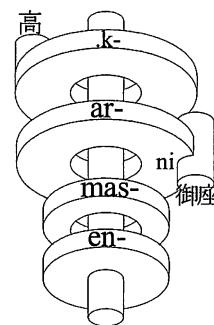
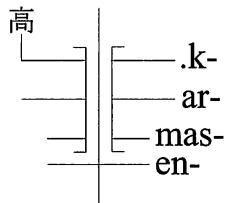
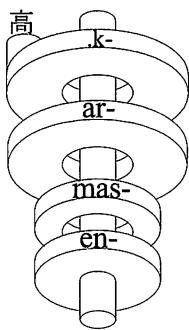


図32-19 高くありません

図32-20

図32-21 高くございません

そして、これを過去にすると図32-22のようになる。

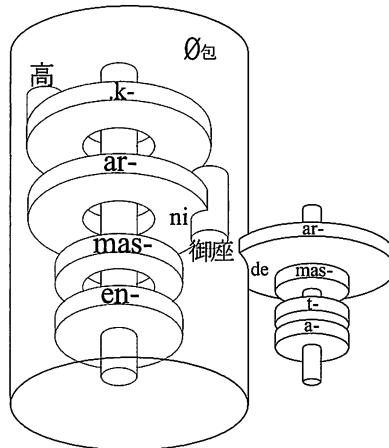


図32-22 高くございました